

# 「歴史的まちなみ保存」をもとにした「観光まちづくり」

—中国福建省泉州市鯉城区西街における文化創意産業をめぐる—

陳珺珺

## はじめに

中国福建省泉州市は2014年に「東アジア文化都市」に選定され、鯉城区の西街における歴史的なまちなみの再生事業について行政から市民までが議論をはじめた。その中で、行政は西街での工場跡地を再利用して大麦倉という文化創意エリアを創設した。当時このエリアで西街の「まちづくり」に関する「西街計画展」という展覧会が開催された。筆者も訪ねたが、この展覧会では、2013年までの西街における「まちづくり」の進展を回顧し、西街の未来の改造計画が模型と写真を通して展示された。特に、西街に関するまちづくりのアンケート調査の中で「あなたは西街に関する再生事業をどう考えるか」という質問が筆者の脳裏に深く印象付けられた。当時、文化創意産業という新たな産業はイベントのテーマの一つであったが、いまや文化創意産業は西街におけるまちづくりの中で重要な役割を果たしているのである。

行政による西街の「まちづくり」計画の中では「観光」が強調されている。西街には開元寺、閩南の伝統的古民家などの観光スポットがあり、今まで観光者のまなざしを多く集めてきた。日本では2000年前後から「観光まちづくり」という概念が現われた。「観光まちづくり」とは、文字通り「観光」と「まちづくり」が合体した活動であり[安村 2006:4]、「地域が主体となって、

自然、文化、歴史、産業など、地域のあらゆる資源を生かすことによって、交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」[観光まちづくり研究会 2000:5]と定義されている。本論では、西街における文化を活かした文化創意産業を中心に、歴史的なまちなみ保存を取り入れた「観光まちづくり」についての考察を行う。

筆者は、歴史的なまちなみの保存による観光開発という政策に対しては一つの疑問をもっている。「保存」と「開発」はどちらか一方であれば両立できるのだろうか。中国では、「改造」されて有名な観光地になった歴史的まちなみはどれもみな似たようなものとなり、地域の特色が見られなくなっている。歴史的まちなみを活かした日本の「観光まちづくり」では、歴史的な景観が「完全に」保存されているとの印象をもっている。また、泉州と同じ閩南文化圏に属する台湾では、文化創意産業を「観光まちづくり」の中で役立てている。

日本と台湾の歴史的まちなみを活かした「観光まちづくり」、特に伝統文化を活用した「観光まちづくり」の研究をするために、日本の長浜・黒壁、金沢・ひがし茶屋街、台湾の華山1914文化創意産業園區、剥皮寮歴史街区などで調査を行った。また2016年2月末から3月までと8月中旬から9月上旬までに、中国福建省泉州市鯉城区西街でもフィールドワークを行った。以上の調査に基づいて、中国泉州市西街における「歴史的まちなみ保存」をもとにした「観光まちづ

くり」を考察して、日本と台湾の先進事例を参考にして、西街における「観光まちづくり」の問題点を明らかにし、今後の方針についての提言を行う。

本論の構成は以下のようになっている。

Iでは、「観光まちづくり」と文化創意産業をめぐる先行研究を紹介する。IIでは、歴史的まちなみを生かした「観光まちづくり」に関する欧日台の先進事例を紹介する。IIIでは、中国福建省泉州市鯉城区における西街の「観光まちづくり」について紹介し、IVでは、IからIIIまで述べてきた先行研究や調査をもとにした比較と分析を行い、西街における「観光まちづくり」について考察する。Vでは、結論としてIVの考察を踏まえて、西街における「観光まちづくり」についての議論を総括する。

## I. 「観光まちづくり」と文化創意産業 をめぐる先行研究

### 1. 「観光まちづくり」

#### (1) 観光のまなざし

大衆観光者のまなざしがどのように形成され、どのような対象に向けられるか、J. アーリの『観光のまなざし』(2014)からまとめてみる。アーリはフーコーの医学的まなざしを援用し、日常から離れた非日常的な景色、風景、まちなみをまなざすのが観光であり、社会的に構造化され組織化されているのが観光のまなざしであるという。アーリの観光のまなざしで特に問題となるのは、まなざしに向けられる対象として「夢とか空想」を通して、日常とは「異なった尺度あるいは異なった意味を伴うようなものへの強烈的な愉楽」が期待できるものが選ばれる点である。そして、そのまなざしは記号を通して構造化される。その記号が集積されたものが観光であると指摘している。

アーリは「ロマン主義的まなざし」は、エリートたちによって、ひとり聳えたち、

人を近付けないようなヨーロッパアルプスなどに向けられたが、鉄道が通り、庶民も行ける「日常茶飯」の旅行になるとエリートたちが避けるようになり、多くの人が集まるから自分もまなざしを向けるという「集散的まなざし」の対象に変化したと指摘する [アーリ 2014 : 54, 315 ; 橋本 1999 : 41, 46, 47]。観光のまなざしはこのように社会的背景を反映するものであり、今日のグローバリゼーションや移動による世界の流動化もこの観光のまなざしに強い影響を与えているという。

#### (2) 生活環境主義

古川・松田共編の『観光と環境の社会学』(2003)においては、過疎化、高齢化の状況に苦吟している日本の農山漁村地域における共同体のあり方と、近代市民社会の成立と密接不可分なものとして誕生した「観光」との関係を扱っている [古川・松田 2003 : 1]。21世紀を迎えた近代市民社会が直面するある種の制度疲労が原因となって、「自然との共生」という議論が出現した。しかし、古川・松田はこの議論には「現にそこで暮らしを営んでいる地域生活者の存在」が欠落していると指摘した [古川・松田 2003 : 2]。そのような実例として興味深かったのが、大成による第3章「新しい過疎の風景」であり、富山県利賀村における地域おこしのダイナミズムとネットワークを扱っている。

本論文はグリーン・ツーリズムや農山漁村の地域おこしを直接扱うものではないが、都市の中で歴史的まちなみを保存する「観光まちづくり」の議論においても以上の生活環境主義に注目すべきであると考えている。

#### (3) 「観光まちづくり」

「観光まちづくり」では、必要な資金やノウハウを外部の資本に依存して大規模な開発をするのではなく、地域の行政・企業・

住民が相互の人的・産業的ネットワークを形成しつつ、主体的、内発的に観光の展開を図っている。また、既存の施設や文化遺産などを活用して自然・社会の環境許容量に適合した規模の事業を目指すことになる。こうした特徴は、いわゆる「サステナブル・ツーリズム」の概念とほぼ重なりあうものといえる〔堀野 2014: 169〕。

「観光まちづくり」における、もっとも大きな問題は、観光による商品化である。人気の観光地となるにつれ、外部資本の参入や観光客の過剰な入り込みが起り、没个性的なグッズや店舗が登場し、従来の雰囲気失われ、いわゆる「俗化」が進行する。また、まちづくりを担う側の問題もある。「観光まちづくり」における現実的な問題は、「つねに理念や戦略にフィードバックされ、その妥当性や実効性を問い直し、再構築を迫ることになる」と堀野は指摘している〔堀野 2014: 170-173〕。

## 2. 文化創意産業をめぐる先行研究

### (1) 文化創意産業とは

オーストラリアとイギリスにおけるクリエイティブ産業 (Creative Industry) は、後藤 (2013) によると以下のように説明されている。クリエイティブ産業という言葉が最初に使われたのは、オーストラリアである。1994年にオーストラリア政府が「クリエイティブ・ネイション」政策の一部として打ち出したのが、アートと新しい情報技術を融合した「クリエイティブ産業」であった。1997年にはイギリスの文化・メディア・スポーツ省が政策としてその振興に乗り出した。イギリスでは1998年にクリエイティブ産業を「個人の創造性やスキル、才能を基礎とし、知的財産権の生成と開発を通して、富と雇用のポテンシャルを有する産業」と定義している。

日本では2004年に、映像や音楽、出版、ゲーム等に限定したコンテンツ産業振興が

スタートし、2011年にはクールジャパン戦略に呼応してクリエイティブ産業振興が開始された。日本の経済産業省等は、クリエイティブ産業に「生活文化創造産業」という日本語訳を当てているが、その明確な定義と範囲は決めておらず、日本の生活文化である衣食住およびエンタテインメントにかかわる産業であるとしている〔後藤 2013: 57〕。

台湾と中国大陸において、文化創意産業という言葉が最初に使われたのは台湾であった。『中華民国文化創意産業發展法』(2010)によれば、文化創意産業は、「創意や文化の積み重ねから生まれ、知的財産の形成及び活用を通し、富と雇用のポテンシャルを有し、また全国民の美学的素養を促進し、国民の生活環境を向上させる産業」と定義されている。中国大陸では文化創意産業という名称が引用されているだけで、中国全体での統一的で明確な定義はなされていない。しかし、中国文化部は個別に「文化産業の発展を支持し、促進させるいくつかの意見 (关于支持和促进文化产业发展若干意见)」(2003)の中で文化産業を定義している。文化産業とは「文化製品の生産に従事する産業、または文化のサービスを提供するサービス産業 (从事文化产品生产和提供文化服务的经营性行业)」である。

### (2) 欧米日中の文化創意産業をめぐる研究

クリエイティブ産業振興政策と密接な関係にあるのが創造都市論である。

#### ① 創造都市論

チャールズ・ランドリーは『創造的都市 - 都市再生のための道具箱』(2003)で「創造都市」を提唱する。ランドリーは、ヨーロッパ社会においては他国よりも早く製造業が衰退し、青年の失業者が増えており、従来採用されてきた福祉国家システムが財政危機に直面して崩壊しそうになった背景の下で、芸術文化が持つ創造的なパワーを

生かして社会の潜在力を引き出そうとするヨーロッパの都市の試みに注目し、その経験の総括を通じて創造都市を理論化している。ランドリーの研究においては、産業的イノベーションとインプロビゼーションを得意とする都市を「創造都市」と呼んでいる。

日本における創造都市に関する代表的な研究は、佐々木の『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』（2012）で、ポローニャ、バルセロナ、金沢、横浜などの諸都市における「創造都市」の発展を紹介し分析している。佐々木は「創造都市とは市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような「創造の場」に富んだ都市である」と定義している[佐々木 2012: 40]。

## ②創造階級論

また、クリエイティブ産業と都市をめぐるもうひとつの理論としてリチャード・フロリダによる創造階級論（クリエイティブ・クラス理論）がある。彼によれば、創造的コミュニティを実現するためには創造性の社会的構造、とりわけ社会的文化的地理的環境が重要であると指摘し、クリエイティブ資本論を提出した。さらに、この創造階級が好んで居住する都市や地域の特徴を3つの「T」（人材（Talent）、技術（Technology）、寛容性（Tolerance））で示した[フロリダ 2008:313, 同 2014:245]。

## ③中国の創造都市——北京 798 芸術地区

北京は中国の首都であり、政治的また経済的な中心地という立場であるゆえ、中国の国家的な政策を反映する「鏡」とみなされている。798芸術地区は中国の数多くの芸術地区の一つに過ぎないが、国内外で一番

高い注目度を得ており、代表的で典型的な事例となっている。しかし、798芸術地区は当初のアーティストが自由に創作活動を行う空間という面影は今やなくなり、「よく知られた」場所にやってきた観光客がたちよるだけの空間になった。当初のアーティストたちは、部屋代の高騰によってもはや住むことは出来ず、アーティスト不在の798芸術地区になっているという大きな問題をかかえている。

## Ⅱ. 歴史的まちなみを生かした「観光まちづくり」の先進事例

### 1. ヨーロッパの景観規制と欧州文化首都

ヨーロッパの歴史的なまちなみを見ると、まちなみの景観は統一性が高いと感じられる。上田は「ヨーロッパの景観規制制度—『景観緑三法』提出に関連して」（2004）でイギリス、イタリア、ドイツ、フランスの景観規制制度を取り上げて紹介している。特に、イギリスの歴史的遺産保護と景観規制に注目している。イギリスにおいては、1930年代から、都市を象徴する建造物をさまざまな所から眺めることができるように、対象物と眺望点の間の高さ規制が行われている。

また、欧州文化首都は、経済統合が停滞していたEC（欧州共同体）を活性化させようと、1985年にギリシャの文化大臣で国際的な女優であったメリナ・メルクーリが、欧州連合（EU）の人々がお互いの文化を理解し、真に結びつくために提唱したことが発端で創設された。欧州文化首都の重要な役割は、文化の多様性を受け入れる事と同時に、欧州としての共通性を見つけて共感できる貴重な機会を創出することである。また、欧州文化首都の開催による観光促進や地域開発などの経済活性化効果は高く、欧州全体として「観光まちづくり」を目指しているとも言えよう。

開始当初は各国の首都や大都市を舞台にした文化フェスティバルが中心であったが、1990年代以降は地方都市の立候補が増え、地域の経済的・文化的発展の契機としても活用されてきた。例えば、英国のグラスゴー（1990）やドイツのエッセン市は、欧州文化首都というブランドを利用して、古い産業都市をアートプロジェクトによって活性化させ、文化資源を活かして発展する創造都市の好例として注目されている。

## 2. 東アジア文化都市

前節の欧州文化首都から派生したアジアにおけるプロジェクトが東アジア文化都市である。東アジア文化都市は、中日韓文化大臣会合での決定に基づき、中国・日本・韓国の3か国において文化芸術による発展を目指す都市が選定され、その都市において現代の芸術文化や伝統文化、その他の多彩な生活文化に関連する文化芸術イベントなどを実施するプロジェクトである。これにより、東アジア域内の相互理解と連帯感の形成を促進するとともに、東アジアの多様な文化の国際発信力の強化を図ることと、東アジア文化都市に選定された都市がその文化的特徴を生かした、文化芸術・クリエイティブ産業・観光の振興と事業実施を契機とした継続的発展を目的としている。2013年9月の第5回中日韓文化大臣会合において泉州市（中国）、横浜市（日本）、光州市（韓国）の3市が2014年の東アジア文化都市に選定され、2015年以降は中日韓3か国で毎年各国1都市を選定し、持ち回りで開催していくことになった。

### 3. 日本における歴史的まちなみに基づく「観光まちづくり」

日本の文化庁は1975年に文化財保護法を改正して伝統的建造物保存地区制度を発足させ、城下町、宿場町、門前町など日本各

地に残る歴史的な集落・まちなみの保存を図った。日本の市町村は伝統的建造物群保存地区を決定し、地区内の保存事業を進めるため、保存条例に基づいて保存計画を定めた。伝統的建造物保存地区は周辺環境と一体となって歴史的景観を形成し、価値の高い歴史的なまちなみとなっている。この歴史的なまちなみの保存と観光的魅力を持つ地域文化資源の活用を図るのが歴史的まちなみに基づく「観光まちづくり」である。

#### ①長浜・黒壁

滋賀縣長浜市にある株式会社黒壁は、市民が設立して経営する会社を中心市街地内の空き店舗や空き地を活用してその再生を果たした例として多くの人々に知られる存在となった。2015年8月20日に長浜でフィールドワークを行った。

長浜における中心市街地の再生を目指した黒壁の「観光まちづくり」は、一応成功しているといえる。しかし、問題点もある。隣の地元民用の商店街はあまりこの成功の恩恵をこうむっていない。ここではまちとまちの連携の問題が解決されておらず、文化創意産業の創出によってまちづくりが成功したように見えてはいるが、地元住民が生活しやすい環境にまで配慮が行き届いているかどうかを考える必要がある。これは、本論文の中国福建省泉州市鯉城区の西街に対する考察にも参考になることである。

#### ②金沢・ひがし茶屋街

2016年6月1日から6月3日まで、日本における創造都市のひとつの代表と考えられる金沢のフィールドワークを行い、主に古いまちの再生と保存、再利用などを調査した。東、西、主計町の三茶屋街では、古い建物を再利用して、文化館、記念館、飲食屋などに使っている。また、このまちでは新築した建物も古民家と同じ様式で建てられていた。特にひがし茶屋街の古民家には詳しい説明をつけた説明板があり、建築年

なども紹介している。「観光まちづくり」のよい事例である。

金沢は歴史都市としての雰囲気が高く、創造工夫の部分も多くあり、観光まちづくりの代表的な事例となっている。特にひがし茶屋街の全体整備は本論文で泉州の西街を考察する時、良い参照事例となる。それぞれのエリアには、観光者用の休憩所があり、観光ボランティアガイド「まいどさん」が待機して、このまちの歴史を紹介している。すなわち、文化は都市と地元民と観光者をつなぐものとなるともいえよう。

#### 4.台湾における歴史的まちなみに基づく「観光まちづくり」

筆者は台湾における歴史建築の保護に注目して、2016年3月22日から3月27日まで団体ツアー「台湾の高雄-台南-台中-台北-金門」に参加し、調査を行った。台湾の歴史的まちなみや歴史的跡地は文化創意産業という新たな観光まちづくりの形で再生された。以下、台湾における文化創意産業の事例を紹介する。

##### ①歴史建築群の再生によるアート・イベント空間の創出——華山1914文化創意産業園區

華山1914文化創意産業園區は台北市中正区八徳路一段1号に位置する。園區は日本統治時代の1914年に建てられた酒工場の跡地を再利用したアート・イベント空間である。園區ではデジタル美術館やギャラリー、ライブハウスのほか、モダンなカフェやおしゃれなレストラン、ショップなどが充実している。毎月ここでは色々な展覧会やイベントが開催されており、教育展・絵画展・音楽演奏からファッション講座も開かれ、イベントの内容は盛り沢山である。華山1914文化創意産業園區は特に、建築の外見は自然と歴史が統合されており、100年の歴史が感じられる。今後も文化を伝承し、様々なアイデアを集めて世界にアピールしていく

ことだろう。

現在の園區は3つの空間に分けられる。1) 自由空間、2) 賃貸空間、3) 商業空間である。1) 自由空間には、24時間誰でも使える公園などがある。2) 賃貸空間では各種のイベントが開催され、3) 商業空間では、文化創意産品が販売される。園區のショップで販売されているものは、台湾の文化（アイデア）を活かして創造されたものだけではなく、世界中の食文化や工芸文化からアイデアを得て創造されたものもある。

華山1914文化創意産業園區は、「華山1914」というブランドで一応の成功を収めている。廃棄された酒工場が芸術家・市民・観光者の三者交流の空間になり、全体的にバランスよく発展し、あまり使用されない空間を賃貸の空間として活用している。園區の商店も文化資源を強調した自らのブランドを打ちあげて、新たな（観光）商品として販売している。

##### ②宗教と映画を活かす歴史的まちなみ——龍山寺と剥皮寮歴史街区

龍山寺は台北に広州街211号に位置し、龍山寺から菓草街を抜けた康定路・広州街・昆明街に囲まれた老松小学校に隣接する一体が剥皮寮歴史街区である。この地域は台湾映画『モンガに散る（艋舺）』の舞台になった。龍山寺はその映画で台湾のヤクザが義兄弟の契りを結ぶ場である。この龍山寺は中国福建省泉州から渡来した人々により、泉州晋江安海龍山寺から分霊して創建された、台北市内で最古の寺院である。

龍山寺から歩いて10分のところに剥皮寮歴史街区がある。ここは先の映画の撮影場所として有名な観光地になっている。この地区の歴史は古く、清朝時代に石炭や木材の集散地として発展したために、洋館も多い。「剥皮」の名前は木の皮を剥ぐ事業に由来する。現在剥皮寮歴史街区は2004年から2009年まで台北市政府によって修復され、清朝時代の街のスタイルや当時の伝統的な

商店建築が保存されている。街には赤いレンガの騎楼、アーチ型の歩道、花が彫刻された窓の格子などが見られ、古い店舗を紹介する詳しい案内板もある。現在は誰も住んでいない、完全な観光地となっており、オープンミュージアムのようなものである。その中に「台北市郷土教育センター」がある。学校教育とコミュニティ文化を組み合わせ、異なるテーマの展覧会や特別展などを開催して台北郷土教育を推進し、歴史的まちなみを見学できるスポットとなっている。

この地域は本論文が扱う中国福建省泉州市鯉城区の西街と同じ環境にある。寺院がある歴史的なまちなみで信仰と観光が両立している。剥皮寮歴史街区では歴史的まちなみは上手に保存されているが、地元住民がいない観光地である。つまり単なるテーマパークであり、映画で有名になりフィルムツーリズムのまなごしを受けて観光者が多く集まったとしても、映画のセットとして存在しているだけである。これは筆者が目指す生きた人々による「観光まちづくり」の対象とは異なる事例となっている。

以上は各地域の先進事例である。これらを参照して、Ⅲでは中国福建省泉州市西街における「観光まちづくり」を考察する。

### Ⅲ. 中国福建省泉州市鯉城区における西街の「観光まちづくり」について

#### 1. 中国福建省泉州市鯉城区の西街における行政による「観光まちづくり」について

筆者は2016年2月末から3月までと8月中旬から9月上旬まで中国福建省泉州市鯉城区西街でフィールドワークをした。以下、現地フィールドワークに基づいて、西街における「観光まちづくり」の現状を説明する。

市政府による西街における「まちづくり」は2004年に遡る。2004年10月1日、西街

の鐘楼エリアに関する改造プロジェクトが始まった。このエリアの新築の面積は1.44万㎡である。改造された建築物は3階建てのコンクリートマンションが主となっている。また、歴史文化観光のために新築された建築は外見が隣接する中山路の古い騎楼を模して、1階は店舗で高さが4.2m、2階と3階は高さがそれぞれ3.3mのマンションが建てられ、外装には閩南伝統建築の赤いレンガが使われ、黄色い燕尾の軒がある。この建築は西街の古いエリアの建物の高さと同じになっている。このように泉州市政府は「歴史的名城保護」の名のもとに、中山路の古い騎楼のデザインを鐘楼エリアにも残そうとした。

続いての改造は2007年2月におこなわれた西街市場の移転工事であった。市政府はここにあった遺跡を復元するため、既存の西街市場を移転させ、牌坊、廊下、マンションなどの他に、遺跡広場と舞台を新たに設けることにした。現在、肅清門遺跡文化広場は伝統文化と文化創意産業の展示場になり、いろいろなイベントが開催され、市民や観光者と伝統クラス、創造クラス、行政などとの交流の場になっている。

2011年11月15日に開元寺観光用の駐車場工事が始まり2013年4月に完了した。この駐車場は泉州中僑集団の工場の跡地を利用して造られた商業用モールに併設された。工場の建築物は全部解体され、地下は7,000㎡のスーパーと駐車場で、地上には3階建て約10,000㎡の観光客と一般客向けのショッピング・モールが建設された。

2013年に泉州は「2014年東アジア文化都市」に選定され、西街は泉州市の歴史的まちなみとして、「2014年東アジア文化都市」のイベントの開催場所になった。その頃、市政府によるまちづくりは西街の西側で進められていた。

西街の西側には工場跡地があった。そこは泉州近代工業の縮図とも言えた。2013年11月に大麦倉でイベント用の舞台工事が始

まった。この工事は泉州旧小麦工場の跡地を利用して、2,640㎡の空間に高さ26.3m、長さ97.1mのセミオープンな鉄鋼の建造物を建築した。完成した大麦倉は、2011年に泉州源和堂のシロップ漬け工場の跡地に造られた源和1916文化創意産業園の一部分になり、創意、文化、展示、芸術、観光などを一体化した総合的な文化創意産業園区になった。現在は芸術のイベント会場になっており、また、周辺の旧工場の建物を活かした商業モールも建設中である。

2015年9月、西街開元寺のすぐ東側に位置する116号宋宅の改修工事が始まった。これは、市政府による西街古民家改修の実験場であるといえる。宋宅は1912年にフィリピン華僑宋文圃氏によって建築された西洋風の建物である。外見は西洋風の2階建てで、内部構造は泉州木造古民家様式である。改修工事は「建物が元のように修復される」ということを目標にして、泉州古建築会社に任せられた。泉州古建築会社には伝統古民家建造技術継承人がいるので、伝統的な技法でこの建物を改修することができる。宋宅の改修工事は、廃棄された古民家自身の赤いレンガを再利用し、木材は以前のを模したレプリカが使われた。また、壁は形が異なる石の間に平積み煉瓦を重ねた泉州の伝統的建築方法の「出砖入石」という技法で造られた。現代建築技法も使われており、排水は、以前は柱の中におけを設置し、雨水がおけを通して地面に流されていたが、現在は直接近代的な排水管に流されている。また、安全のために、木造の床の下が鉄材で補強された。2016年8月、古民家の改修は完了した。

以上が、政府による泉州市鯉城区西街における「観光まちづくり」の概要である。このように以前は古民家を取り壊して、全く新しい建物を建て、昔の面影を残さない都市改造をしてきた政府が方針を変えて、政府が歴史価値を認めた場合にかぎり、古民家を元通りに再生する方向に向かっている。

この復元工事については評価できる。しかし、普通の民家の再生に関しては民間に委ねる以外に方法はない。民間による古民家を改修した「観光まちづくり」も始まっている。その興味深い事例を次節で紹介する。

## 2. 西街における民間による「観光まちづくり」

以下、現地でのフィールドワークに基づいて、大拾堂と壹平尺、美好生活造物社の3つを代表的な事例として、西街における民間による「観光まちづくり」の現状を説明する。

### (1) 大拾堂 (DA SHI TANG)

大拾堂では文化創意商品、デザイン、壁絵などを販売する他に、絵の塾、伝統文化クラスも併設している。店の創業者は、冬冬さん(30代)、青羊さん(30代)、そして阿来さん(20代)の3人である。フィールドワーク期間中に私は青羊さんと阿来さんに会った。青羊さんはアモイ大学芸術学院の油画専攻を卒業し、現在は泉州師範学院軟件学院の教師である。彼は店の商品のデザイナーで塾の先生としても働いている。冬冬さんも同校のコンピュータ科の教師で、文化創意製品を広める仕事をしている。阿来さんは青羊さんと冬冬さんの学生で、アニメ科を卒業し、現在はこの店の名目上のオーナー(法人)になっている。彼女は店内の商品の販売を担当し、また伝統文化クラスとDIY手作りクラスの責任者である。

なぜ「大拾堂」か、という私の質問に対して青羊さんは、『大』という文字に、我々の夢の大きさを込めた。『拾』には閩南伝統文化と現代の人たちに忘れられた美しい物を拾い集めたいという意味を、そして、『堂』には我々の創作のインスピレーションを発揮する場という意味を込め、名付けた」と答えた。「現在の大部分の子供たちは閩南語



を話せない。言語は文化のなかで重要な位置を占め、考え方や価値観に大きな影響を与えるかもしれない。また、私が絵を描き、教えることで、子供たちは閩南的色彩の美しさや、デザインなどに気づき成長していく。我々もまた閩南文化にふれながら、これを普及させる仕事をしている。この二つが結び合わさることで閩南手絵伝習班と呼ばれるこの塾を開設するに至った」と青羊さんという。

また、大人向けの絵の塾もある。それは約絵大拾堂と呼ばれるクラスである。「約絵」は中国語「约会」（デート）と同じ発音である。すなわち、大拾堂で生徒と青羊さんが絵の世界でデートをするというロマンチックな意味になる。「専攻や仕事が絵と全然関係のない人は、心のなかで絵を描くことは好きだが、専門的な絵を描くことを学ぶ時間がない。このような人が今の社会にたくさんいると思う。だから、私はこのクラスを開設して、大人になった人が日曜日の午後3時から5時まで、絵の世界に入って、絵を描く欲求を実現する機会を提供している」と青羊さんという。

平日はほとんど阿耒さんが店を運営し、塾と伝統文化クラスの生徒の募集なども担当している。しかし彼女は、「青羊さんこそがこの店の顔よ」と笑う。阿耒さんの毎日の仕事は文化創意商品などの販売だけにとどまらず、ガイドの役にまでおよぶ。観光客が来店する度に彼女は西街や、泉州の面白さを紹介している。「観光客が開元寺は平凡でつまらないという、私は少しさびしく思う。だからこそ、できるだけ西街や泉州の面白さを伝えるようにしている」と阿耒さんは語る。そのために、彼女はわざわざ観光ガイドの試験を受けて、泉州における観光ガイドの資格を獲得した。

3月中旬、泉州市は雨季に入った。毎日雨ばかりが続くと、古民家を利用した店は雨漏りがはじまるので、安全のためにしばらく塾は休みになった。「雨が去ったと思えば、

次は家の修理の仕事がやってきた」と阿耒さんは複雑な表情を浮かべていた。

## (2) 壹平尺(YI PING CHI) 服装美学工作室

壹平尺服装美学工作室（以下「壹平尺」と略す）は文敏さん（20代）と咸英さん（20代）の女性二人が設立した店で、伝統文化を尊重し、伝統的な装い哲学を基にしたオリジナルな女性服をデザインしている。また、禅衣や茶衣、ヨーガ服など団体用のユニフォームの注文も受けている。

なぜ路地の奥の古民家を自らの店として選択したのだろうかと聞くと、文敏さんは笑って「だって家賃が安いのももの」とおどけて見せた。続けて彼女は、「冗談よ。実は私は昔から古いものが大好きだから、この古民家を一目見た時に不思議な縁を感じたの」といった。

文敏さんがデザインした服のほとんどは中国の伝統的な服をもとにつくりあげられている。「私は日本人や韓国人が羨ましい。彼らには自身の伝統的服装があり、日常生活でも着用している。しかし、中国には漢服やチーパオなどの伝統的服装はあるが、重すぎてほとんどの人は着用しない。これは本当に残念なことだと思う。だからこそ、壹平尺では伝統文化的要素が強く、なおかつ日常生活にとけ込むような服をデザインしている」と彼女は話してくれた。このような理念で、文敏さんと咸英さんは、重たい刺繍が施された漢服やチーパオなどの伝統的な服を改良し、綿や麻の布地を使って、伝統とファッションを合わせて軽い新たな服装をデザインした。しかし、このような服は現在の社会でもあまり受け入れられない。「私はよく友だちから、もっと現代的なファッションの服をデザインするようにとアドバイスされている。しかし、それは自分の考えとは違っている。改良された伝統的な服が市場に受け入れられるように私たちは頑張らなきゃならないと思う」と文敏さんという。

### (3) 美好生活造物社(MEI HAO SHENG HUO ZAO WU SHE)

美好生活造物社は大虫さん(30代)がパートナーたちと一緒に設立した会社である。この会社は西街の周辺で美好生活小酒館(バー)、旧館駅客棧(ゲストハウス)、芥子書屋(本屋)、美好生活手工坊(DIY洋菓子屋)、真水間院観音壁(中国式喫茶店)、沙茶面館(ラーメン屋)、五餅二魚咖啡(喫茶店)などの店を経営している。大部分の店は古民家を借りている。

社長大虫さんは背が高く、芸術家の気質が強い女性である。彼女は生粋の泉州人で、2004年にアモイ大学美術学科卒業後、一度北京で働いたが、泉州の文化が彼女に創作のインスピレーションを与えるため、結局は泉州に戻った。2008年12月31日に、大虫さんは「183房車導購 183芸術空間」という創意文化産業会社に入って、芸術展の企画の仕事をした。2010年1月16日に大虫さんはその会社から独立して壹式堂創芸館を創立した。「しかし、現実には残酷だ。あの地域の開発で住民を移転させることになった。私は何ヶ月間も立ち退きを拒否したが、負けてしまった。油断した時に、店のなかのすべてのものが壊されてしまった。その時に、私はそこを出て行かなければならないと諦めた」という。

がっかりした大虫さんは西街で偶然にある喫茶店が売り出されているのを発見した。これが現在の美好生活小酒館である。美好生活小酒館は大虫さんの事業の新たな出発点となった。ここで、大虫さんは発見した。「バーの経営と芸術活動を共に私は続けてきたので、「芸術・文化」と「商売」とを両立できるかもしれないと思った。文化創意と商売とを融合し、持続できる事業になれば、私のパートナーたちも安心して前に行くことができる」と大虫さんはいう。「‘美好生活’はスローガンだけではなく、私たち一人一人の心から望むことだと思う。また、たくさんの人はまだ私たちのすること

をあまり理解できない。金もうけばかりに注目が集まって大きな富を手に入れるだろうと思われている。今の人にとっては精神的な富がもっと必要だと思う。だから、私は‘美好生活’を文化ブランドにして文化的価値がある会社になりたいと思う」と決意を述べていた。

現在、周りの人たちは大虫さんを「西街一姉(姉御)」と呼んでいる。「『一姉』は面倒見の良いヤクザの妻のような姉御肌といった感じで、西街のあちこちに私の会社‘美好生活’のロゴがあるため、皆はそこから街を牛耳るヤクザの姉御のようなものを連想して、この愛称を私につけた」と大虫さんは語る。

会社は5年間経営しているが、その5年間で西街にどんな変化があったのだろうか。大虫さんに質問すると、「2011年から現在まで政府は“西街を改造する”という政策を提出しているものの、実際はほとんど行動していない。しかし、我々のような若い創業者が様々な店を創設して、地元住民と一緒にスローライフを楽しんでいる。「西街の人はお茶を飲んで、話して、ゆったりと生活をしている」。それを大虫さんは「スローライフ」だという。この街は地元住民の「スローライフ」に似合うばかりではなく、「文化創意を仕事とする若い人たちにとっても新しい道を切り開くきっかけとなる」と彼女は考えている。

また、現在彼女は旧館駅客棧も経営している。「このゲストハウスのおかげで、さまざまな客と出会い、友人もできた。多くの客はこのゲストハウスを第二の我が家として愛し、そのなかには西街の発展に力をつくすようになった人も大勢いる」と大虫さんは語る。

現在の西街の発展についてどのような問題があるかたずねると、大虫さんは「大きな問題はインフラ整備だ」と教えてくれた。例えば、この周辺の古民家は電線の劣化がひどく、火災がおきることがよくあるそう

だ。「また、我々ゲストハウスの経営者全員が違法運営をしている。消防と衛生、公安、商工などの面から見れば、ホテルレベルには達していないのが現状だ。さらに、観光客の安全のために、市政府が古民家の管理についての行政政策を早急に公布する必要がある」と大虫さんは語る。

このような経緯を見ると泉州市鯉城区西街における観光まちづくりの現状が明らかになる。行政に主導されながらも、民間の力も入っている。特に若い創造クラスの活躍が顕著に見られる。政府と民間がともに西街に地域再生、伝統文化の継承と新たな創造のまなざしを向けている。以下ではこれまでのⅠからⅢまで述べてきた先行研究や調査をもとにして比較と分析をおこない、中国における「観光まちづくり」について考察する。

#### Ⅳ 歴史的まちなみを活かす「観光まちづくり」 —西街を考察する—

##### 1. 観光のまなざしから見る西街の観光

Ⅲの2で現在の西街における観光者の動きについて述べたが、ここでは観光のまなざしがどこに、どのように向けられているかを分析する。市政府は西街の歴史的なまちなみや宗教的なまちなみを活かした「まちづくり」をするという方針を立てている。政府による鐘楼エリアの改造には、観光者向けに泉州の伝統的な騎楼式の建物を新たに建築して、いかにも泉州独特の景観を見せようとの意図が感じられる。そして、肅清門遺跡文化広場の再建や宋宅の改修などの事業も観光者にまなざしを向けってもらうためであり、様々な泉州の伝統的な歴史を集積された記号として、観光者に向けて発信している。また、千年の歴史がある開元寺は、西街における重要観光スポットであり、長年集積的なまなざしを向けられてきた。政府は特別に開元寺用に観光専用駐車

場を設け、側面から大衆観光者のまなざしを西街の開元寺に向けさせようとしている。つまり、市政府は西街において、歴史的な記号の集積を利用して、泉州における歴史的まちなみという観光スポットを構築し、大衆観光者のまなざしを集めようとしているのである。

一方、民間においても伝統的な古民家を利用して、観光者のまなざしを引きつけようとしている。特に西街でゲストハウスを運営しているオーナーたちは古民家を改修し、伝統的な家具などを飾り、さらに部屋には泉州の昔からある城門の名前を付けている。その意図としてはオーナーたちが西街の古民家しか持っていない通常とは異なる「ものがたり」を「夢と空想」として提示しようとしているのである。この日常生活とは異なった空間を提示する西街のゲストハウスに観光者のまなざしが向けられるのである。

##### 2. 生活環境主義から見る西街の「観光まちづくり」

生活環境主義は地域生活者の日常生活を起点とした地域振興や環境保護、あるいはそのための方法としての観光活動の対応を読み直そうという点に特徴がある。それは西街の「観光まちづくり」における民間による文化創意産業を論じるときの参照点とすべきものである。

まず、大拾堂を見てみよう。大拾堂は泉州の伝統的なものから創意を得て、商品を作っている。泉州と中国の伝統文化を伝承するために閩南手絵伝習班という絵の塾と伝統文化クラスなどを開設している。閩南手絵伝習班は閩南文化の継承とその伝統にもとづいた創造性を訴えており、そこに集まる泉州の子どもたちは絵を描くのと同時に地元のことも勉強している。伝統クラスには子どもが集まるだけではなく、大人も参加している。特に伝統習慣を活かしたテ

一マのときには家族全員が喜んで参加している。ここでは青羊さんをリーダーとする大拾堂に集まる創造クラスの人たちが、地域生活者とともに地域文化の伝承と地域の誇りを再構築しようという努力が見られる。

美好生活造物社の大部分の店は西街にあった古民家を改修したものである。すべての店で地元の文化を活かした店舗経営やイベントの開催をしている。大虫さんは「西街での若い創業者はさまざまな店を創設し、地元住民と一緒にお茶を飲んで、話して、ゆったり生活するというスローライフを楽しんでいる」と語った。この話からは、西街における民間による「観光まちづくり」が古川・松田のいう「生活環境主義」と通じるものがあり、地域生活者の日常生活を起点とした地域振興が進んでいることを指摘できる。

### 3. 先進事例の経験から学ぶ西街の「観光まちづくり」

本節では主に前節の問題点を踏まえ、IIの先進事例を参照して分析していく。

#### (1) 景観整備

前に述べたように、西街における「観光まちづくり」の一番の問題点は、まち全体の景観整備計画が欠如していることである。景観整備については、日本の伝統的建造物保存地区が参考になる。伝統的建造物保存地区として選定されたまちは、周辺環境と一体となった歴史的景観が保存され、価値の高い歴史的なまちなみとなっている。金沢のひがし茶屋街を見ると、まち全体は統一的な歴史的な景観が保たれており、歴史的なまちなみに観光者のまなざしが向けられる。

西街では歴史的建造物である開元寺の東西の両塔を周辺から眺められるように高さが規制され、建物は3階建までしか認可されない。また西街は2014年5月に「省級歴

史文化街区（福建省レベルの歴史的な文化まち）」に認定されたが、その歴史的まちなみに対する景観規制はまだ制定されていない。そのため現在の西街にはモダン、ヒストリカル、ポストモダンの3つの空間が混在したまま、統一的な景観が保たれていない。歴史文化街区は福建省レベルの文化財であり、市政府では街の方向性が決められない。現在、西街における古民家の改修・再建築の申出を省政府が受けて、審査している。省政府の後に市の都市計画部門、建築部門と文化部門などが審査を行う。複雑な審査に時間を取られ、修復の必要がある古民家は崩壊の危険にさらされたままあちこちに放置されている。補助金に関しても現在の西街の古民家に対しては公的な補助金を申請する方法がない。歴史的価値があると行政が認めた古民家は、宋宅のように行政が全ての復元資金を提供している。代わりにオーナーは家の使用权を数年分提供する。しかし、大部分の民間の古民家は、民間資金で修復されているのが現状である。

つまり、景観整備の点からみると、西街の観光まちづくりに対しては行政による適切な文化財保護の規制と補助金制度が必要である。インフラ整備に着手することが市政府にとって一番重要なことであるといえよう。

#### (2) 文化創意産業

西街における観光まちづくりにおいては、行政と民間の両者が文化創意産業をいかにして西街の再生の道を進んでいる。現在西街における文化創意産業は、路地の奥に散在している店と工場跡地を利用して文化創意エリアを形成している大麦倉の2つである。散在している文化創意産業に関する店々では、前に述べたように民間資本を主にしてはいるが、行政も若い創業者の補助をしている。しかし、各店が分散しており、強い連携がなく、文化創意産業が西街の「観光まちづくり」に大きな影響を与えているとは

言えない。以上の問題に関して、日本の金沢と長浜・黒壁、台湾の華山1914文化創意園区、北京の798芸術地区を参照して考察してみよう。

金沢と長浜・黒壁は職人を重視し、「文化的生産」をめざしている。台湾の華山1914文化創意園区と北京の798芸術地区の両者は工場跡地を利用し、創造クラスがまず活動をはじめ、後に行政が参加する形をとっている。それらのエリアを民間の企業が管理しており、成熟した文化創意エリアになっている。しかし、北京の798芸術地区では創造クラスが最初は自由に創作活動を行っていたが、家賃の値上げとともに転出してしまった。しかし名前はよく知られており、よく知られた観光地として観光者が依然集まっている。ここでは観光地の俗化の問題が浮上している。その一方で台湾の華山1914文化創意園区は空間を分けて、創造クラスが使用する自由な創作の場が保証されており、また市民のための交流の場があり、更に観光者を相手にする商業空間もある。このように区分することにより、798芸術地区のような創造クラスがない、俗化された観光地区になることを免れている。

西街における文化創意産業に関する2つの問題を考察する。まず、連携強化の問題がある。先進事例をみると、まち全体が「創造の場」になり、代表的な建築物の周辺に集中していることが明らかになる。行政をはじめとして、創造クラスと地域住民は主に文化創意産業を中心にして、まちづくりを進めている。西街では、文化創意産業が始まったばかりで、創造クラスが自発的に古民家を借用して、文化創意の力で西街の「観光まちづくり」にたずさわっている。創造クラスと行政と地域生活者の連携に関しては美好生活社の大虫さんが重視し、積極的に行政との連携を意図してイベントを開催し、地域生活者と観光者との交流の場を創ろうとしている。

第2には、文化創意エリアの機能発揮の

問題がある。大麦倉の改修後は、「西街音楽節」と「アジア芸術節」の二つのイベントが開催された。イベント中は大麦倉の舞台に観光者のまなざしが向けられるが、平日には誰も行かない場所になる。この空間の利用方法に問題が残る。現在行政は大麦倉の周りの工場跡地を利用して商業モールを建設し、娯楽の空間にしようとしている。創造クラスに割り当てられた空間はそのイベント用の舞台だけということになる。台湾の華山1914文化創意園のように効果的に空間を分けて、観光と娯楽と創造との3つの空間を創出することこそこの文化創意エリアにとって重要な課題となる。

### (3) まとめ

以上、調査と先進事例に基づいて西街における「観光まちづくり」を考察した。西街における「観光まちづくり」は行政が主導して、創造クラスの人たちが積極的に参加している。彼らは西街の歴史的まちなみ、仏教・開元寺、閩南の伝統的な古民家という歴史的記号を集積し、観光者にとっての非日常的な空間をつくり、観光者からまなざしを向けられている。

一方、行政は2004年から西街の「観光まちづくり」をはじめたが、それには3つの方向性が見られる。第1に、鐘楼エリアのように、古民家を壊して新たな建築物を出現させた。第2に、遺跡を復元させ、市民のための文化広場を作った。第3に、文化創意産業の発展のために工場跡地を利用し、歴史的価値がある古民家を改修し、創造の場を作った。これを見ると、行政には西街における「観光まちづくり」についての確かな方向性が見られないことが明らかになる。統一的な景観整備がなされず、観光者のまなざしを分散させるだけである。しっかりとの方針に基づくインフラ整備が西街の観光まちづくりは欠落しているといえよう。

その一方、創造クラスの人たちによる西

街の「観光まちづくり」に関しては方向性が定まっており、行政も見直すべきである。第1に、壹平尺の文敏さんのように自分の専門領域に集中し、古民家を利用して観光者のまなざしを受けている事例がある。第2は、大拾堂の青羊さんたちのように、古民家の利用と同時に、閩南伝統文化を活かして観光用の文化創意商品を創り、積極的に西街の観光事業に参加している例がある。最後に、美好生活の大虫さんたちのように、創造クラスの人たちの連携や行政との連携を重視して、行政が主導するイベントを請け負っている例がある。創造クラスの人たちとのつながりを利用して、伝統職人や芸術家などと連携している。地元生活者たちも西街の持つ文化の力を感じとっている。しかし、文化創意産業に関する店舗は大部分が路地の中に分散しており、イベントを催さない限り創造クラスの人たちの連携を示す機会はほとんどない。しかしながら、大拾堂や美好生活の経営者たちは、文化創意商品の販売の他に、閩南伝統文化の宣伝や継承のために、たくさんの活動を行い、地域生活者（特に子ども）に地元に対する誇りを持たせようとしている。

他の問題点としては、古民家の再利用に関する法律的な問題を解決することがある。古民家を改修してゲストハウスに利用しているが、普通のホテルと違って、西街（泉州）に独特な特徴として観光者のまなざしがむけられている。西街における「観光まちづくり」の中で、民間によってなされた成功事例であるが、行政の部局によっては、問題を指摘するところもあり、やっかいな存在と考えられている。

最後に、景観整備と文化創意産業の2点から分析すると、今後の西街における「観光まちづくり」にとって大きな課題となるのは地域ブランディングである。堀野は「地域で考えたコンセプトを具体的なメッセージにする」のが地域ブランディングであるという[堀野 2014:171]。地域ブランドは、

地域資源の価値が地域内の生活者、関連組織に共有され、それが地域外に発信され、定着することによって構築されるのだが、西街には、歴史的まちなみと門前町などの地域資源を統一的に整備して、西街のブランド・イメージを発信することが重要である。また、西街の店が自分のブランドを構築することも必要である。観光者のまなざしは特色がある店にむけられるのである。

## おわりに

本論では中国福建省泉州市鯉城区西街における「観光まちづくり」、特に文化創意産業を中心にして分析してきた。

西街による「観光まちづくり」は泉州市政府が主導している。泉州市は2004年から西街の「観光まちづくり」において3つの方向性を試してきた。最初は、鐘樓エリアで徹底的な改造を試み、現代的な「閩南伝統」的建造物を新築した。次に、遺跡を復元した時には市場を移転させ、文化広場を作った。現在は、歴史的価値がある古民家の復元や、工場跡地を利用して市民との交流の場や創造クラスと共同で創造の場を、そして観光者用の観光の場などの空間を作っている。行政による、西街の「観光まちづくり」の方針は、このように変わってきた。古民家を取り壊して、全く新しい建物を建て、昔の面影を残さない都市改造が当初なされたが、現在は建築の歴史的価値を重視し、古民家を元通りに再生する方向に向かっている。

本論で注目したのは、民間による西街の「観光まちづくり」であった。創造クラスの人たちを代表として、古民家の改修と再利用が精力的に進められている。彼らは家賃が安い古民家を使用し、行政から援助をもらって、文化創意産業に関する店を営み、観光や文化創造と継承のための仕事をしている。創造クラスの人たちは熱心に、西街の観光事業や再生事業に参加している。

しかし、手が付けられたばかりの西街における「観光まちづくり」には、大きな問題点が2つ見られる。第1は、観光地をめざす景観整備の問題で、第2は、文化創意産業の発展の問題である。先行研究と先進事例を参照し、ここで、西街の「観光まちづくり」についての提案をしたい。

西街における「観光まちづくり」は、観光者にとっての非日常的な観光空間と地域生活者の日常的な空間とが混在しているのが現状である。そのため、観光者のまなざしが定まらず分散している状況がある。筆者は開元寺を中心とする大通りを観光者のための観光エリアとし、独特な歴史価値がある建築物の周辺もそれに含めることを提案する。さらに、創造クラスが活動できる文化創意エリアを観光エリアに隣接させ、支援もおこなう。そうすることで、地域生活者は観光エリアとは離れた日常生活空間で生活を送ることができ、観光者は観光の場で観光経験をし、創造クラスの人たちはそこで創作活動をし、販売することも可能になる。生活環境主義の立場から、その地域で生きる人々の生活環境が守られ、その一方で歴史的建造物を生かした「観光まちづくり」によって創りあげられた空間において、生き生きとした創作活動がなされることによって、地域のファンが集まる。そのような「まちづくり」を提案したい。

## 謝辞

本論文の作成にあたり、終始熱心な指導を賜り、また執筆した文章を辛抱強く丁寧に修正して下さった指導教員の橋本和也教授に、心から感謝いたします。調査協力者である美好生活の大虫さんと大拾堂の青羊さんと阿耒さん、壹平尺の文敏さんにはフィールドワーク中に大変お世話になりました。ここに感謝申し上げます。

本研究科の教員である鶴飼教授、杉本教授、金教授、松田教授、遠藤教授には、論文作成について多くのアドバイスをしてい

ただきました。誠に感謝いたします。いつも、私を見守って下さった研究支援課と教務課の皆様、日本語を教えて下さったチューターの南村志保様、また、一緒に楽しい時間を過ごした院生の仲間たちにも感謝いたします。

最後に、私を生み、大切に育ててくれた両親に感謝します。

## 参考文献

アーリ、ジョン/ラースン、ヨーナス

2014 『観光のまなざし [増補改訂版]』  
加太宏邦 (訳)、法政大学出版局。

上田貴雪

2004 『ヨーロッパの景観規制制度—「景観緑三法」提出に関連して—』国立国会図書館 ISSUE BRIEF NUMBER。

大成浩市

2003 「第3章 新しい過疎の風景—富山県利賀村に見る地域おこしのダイナミズムとネットワーク」、『観光と環境社会学』新曜社。

観光まちづくり研究会

2000 『観光まちづくりガイドブッカー 地域づくりの新しい考え方—「観光まちづくり」実践のために』 (財) アジア太平洋観光交流センター。

後藤和子

2013 『クリエイティブ産業の経済学—契約、著作権、税制のインセンティブ設計』有斐閣。

佐々木雅幸

2012 『創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ』岩波書店。

2014 「伝統工芸と創造都市：金沢と京都からの創造」、『特集：クリエイティビティの追求する地場産業・伝統工芸』地域開発 602。

## 西郷真理子

- 2005 「7—長浜・黒壁から町づくり会社を考える」、『まちづくり教科書9 中心市街地活性化とまちづくり会社』丸善株式会社。

## 古川彰, 松田素二

- 2003 「序章：観光という選—観光・環境・地域おこし」、『観光と環境社会学』新曜社。

## 橋本和也

- 1999 『観光人類学の戦略：文化の売り方・売られ方』世界思想社。  
2013 『観光経験の人類学：みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社。

## フロリダ、リチャード

- 2008 『クリエイティブ資本論—新たな経済階級（クリエイティブ・クラス）の台頭』井口典夫（訳）、ダイヤモンド社。  
2014 『新クリエイティブ資本論—才能（タレント）が経済と都市の主役となる』井口典夫（訳）、ダイヤモンド社。

## 堀野正人

- 2014 「第12章 観光まちづくり」『観光学ガイドブック：新しい知的領域への旅立ち』ナカニシヤ出版。

## 安村克己

- 2006 『観光まちづくりの力学——観光と地域の社会学的研究』学文社。

## 吉田春生

- 2006 『観光と地域社会』ミネルヴァ書房。ランドリー、チャールズ  
2003 『創造的都市——都市再生のための道具箱』後藤和子（訳）、日本評論社。

## 劉継東

- 2014 「中国における現代芸術創造の場としての創意園区—北京 798 芸術地区を中心に」静岡文化大学文化政策研究科 修士論文